



宇喜多秀家匿居之地

関ヶ原の戦いで西軍に属して敗れた宇喜多秀家は、近臣数名とともに関ヶ原を脱出し、伊吹山中へと逃れた。しかし、山中で道に迷い、二日間さまよった末、粕川谷の中山郷（現・岐阜県揖斐郡春日村中山）に差し掛かり、当地の矢野五右衛門重昌と出会う。

当時、在郷百姓らによる落武者狩りが激しく、五右衛門は一行を自宅裏の穴蔵に匿い、四十日以上にわたり匿居させたという。一説には、五右衛門がかつて前田家に仕えており、秀家の従者・進藤三左衛門の姉・滋野が五右衛門の妻であった縁から、矢野家を頼ったとも伝わる。

五右衛門は、秀家を病人に仕立てて輿に乗せ、有馬温泉へ湯治に赴くふりをして白檜村を出立。近江武佐、京・伏見を経て、大坂の宇喜多屋敷まで無事に送り届けた。秀家はここで妻・豪（前田利家の四女）と再会を果たす。

感謝の証として、秀家は豊臣秀吉より賜った朱印状を五右衛門に与え、これが矢野家の家宝として、現在も大切に保管されているという。

元無格社の神明神社（現在は白檜神社に合祀）は、五右衛門が宇喜多秀家の武運長久を祈願して創建したものである。



白檜城址

延徳2年（1490年）、斎藤利安によって築城され、利賢、利三の三代にわたり、92年間にわたって斎藤家の居城となった。

斎藤利安は、美濃守護・土岐政房および政頼の二代に仕えた守護代であったが、享禄3年（1530年）に斎藤道三により暗殺された。

その子・斎藤利賢は父の仇を討つべく道三に対して報復を企てたが、土岐頼芸の反対により果たせず、白檜城に蟄居した。

利賢の妻は明智光継の娘であり、その子である斎藤利三は、明智光秀の甥または従弟にあたる。

利三の兄・石谷頼辰は、本能寺の変後に土佐国へ移り、親族である長宗我部氏に仕えた。

なお、白檜城は春日の局が出生した地でもある。江戸時代の慶安3年（1650年）の大雨による山崩れで城の中心部は失われ、小丸を残すのみとなった。



斎藤利三

母は室町幕府の重臣・蜷川親順の娘。利三は上京後、松山新介に仕えて京都白河の警護にあたった。実兄の石谷頼辰や従兄弟の明智光秀と同様に、幕府の奉公衆としての出自を持つ。

継室は稲葉良通(一鉄)の娘であり、春日の局はその娘である。また、茶人・津田宗及らと交遊し、茶の湯にも通じていたという。

異父妹は、永禄6年(1563年)に長宗我部元親の正室となり、嫡男・信親ら九人の子をもうけた。一時は稲葉氏に仕えていたが、稲葉一鉄が織田氏に寝返るとこれに従ったとも、与力として従属していたともいわれる。その後、稲葉家を致仕し、明智光秀に召し抱えられ、明智秀満と並ぶ筆頭家老となった。

光秀の丹波平定後は、1万石を与えられて丹波黒井城主となり、氷上郡の統治を任される。

天正10年(1582年)、光秀が本能寺の変を計画した際には、藤田行政、溝尾茂朝、明智秀満らと共に計画を知らされており、利三もこれに加わった。

その無謀さを危惧して反対したとされるが、主君の命令と恩義により、やむなく参加したと伝わる。山崎の戦いでは先鋒として奮戦するも敗走し、近江・堅田に潜伏していたところを、旧知の猪飼秀貞に捕縛され、秀吉に引き渡された。

同行していた息子二人は、その場で斬られたという(『兼見卿記』)。



春日の局 出生地

春日の局(阿福)は、天正7年(1579年)、白檜に生まれ、4歳までを当地で過ごした。父は斎藤利三、母は稲葉良通(一鉄)の娘・稲葉安、または一鉄の姉の娘・於阿牟とされる。

その後、伯父・稲葉重通の養女となり、稲葉家の縁戚である稲葉正成の後妻となった。正成は関ヶ原の戦いで、小早川秀秋を説得して東軍へ寝返らせ、徳川家康の勝利に貢献した。

春日の局は、徳川家光の乳母として大奥の基礎を築いた女性であり、松平信綱・柳生宗矩と並び「鼎の脚」と称され、徳川政権の安定に大きく寄与した。

大奥の制度を整備し、実質的には老中以上の権力をもった存在となる。

寛永6年(1629年)10月10日には、後水尾天皇と中宮和子に拝謁し、従三位と「春日局」の名号、天酌御盃を賜った。

寛永9年(1632年)の再上洛時には従二位に昇叙され、緋袴の着用も許された。以後は「二位局」とも称され、平時子や北条政子に並ぶ高位の女性と見なされた。

寛永12年(1635年)には、家光の命により、義理の曾孫・堀田正俊を養子とする。

また、寛永19年(1642年)、慶長5年(1600年)の関ヶ原合戦で焼失した南宮大社の再建を家光に願い出て、再興が叶った。南宮大社は、以後歴代将軍により崇敬された。なお、春日の局の実家・稲葉家の血筋は、仁孝天皇の生母・勸修寺嫡子を通じて皇室にも繋がっている。